

---

# 上下に動く箱

柳田龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

上下に動く箱

### 【著者名】

Z9037F

### 【作者名】

柳田龍

### 【あらすじ】

マンションは閉鎖された空間。その中のエレベーターは、箱の中の箱。

小さい頃、エレベーターって奴に乗るのが怖かつた。おまえもうじやないか？

なんていうのかな。あの一瞬地に足ついてない、不安定な感じ。重力からの解放じゃなくて、なんだか違う世界に向けて放出される、不安感があつたんだ。もちろん、親と乗る時はさほど怖くもなかつたんだけど。

ホラー映画のワンシーンで、上がつてくエレベーターが一瞬、階段通り抜ける時に毎回外に同じ人が立つていて、つてのがあつたじゃないか。あれを見てからはさらにエレベーターに乗らなくなつたよ。知らない人が乗つてる時なんか絶対乗らない。健康第一、階段がいい。

でも階段つていうのもクセモノでさ、曲がろうとする時誰かにぶつかりそうになるのが怖いんだ。それは知らない、危ない人かもしれない、つていうのもあつたんだけど。

ぶつかつた反動で塀を乗り越えて、下に見える寒々とした駐車場のアスファルトに叩きつけられる想像をしちゃうんだよ。だからゆっくり降りるんだけどさ、そうすると怖い妄想が加速してくんだよ。いや、ま、要するに俺は高いところが苦手なんだよな。遠い景色に速い風。遙か地上は呼んでいる。つてさ。

何から話し始めたんだっけか？　ああ、そつそつ。覚えてる覚えてる。そう怖い顔しないでくれよ。マンションの管理人なんて仕事も退屈なんだ。これで管理人室が一階になかったら、すぐに辞めて

るよ。それにしても、おまえの訪ねてきた家人、帰りが遅いな。

「Jのマンション？」怪談話は特に無いよ。螺旋階段の柵も最初からついてたし、別に自殺者が多かつたからじゃない。エレベーターで見知らぬ男と会う、なんてのもない。……別にもつ俺もエレベーターが怖くは無いよ。いい歳だしな。

ただ、地下駐車場でなんか嫌な臭いがするっていうのは聞いたことがあるかな。エレベーターで上がる時とか。ひょっとして、なんか怪物でも住み着いてんのかな。はは。地下迷宮、みたいな。

そうそう、この前久々にねずみを見かけた。この都会でも案外、居るところはあるんだねえ。ただ、それが住人の部屋に出たみたいでさ、「J」の袋の中に死骸が入つてたんだ。建つて間も無いのに、もつ「ゴキブリやらねずみやら出るのか……」一種の欠陥住宅なのかな。

「ゴキブリ、おまえも好きじゃないよな。出るんだよ。この部屋にも。試しに捕まえて、ギネス記録挑戦してみるか？」口の中に生きたままゴキブリを入れて、十秒耐えるつて奴らしい。口に入れる数が多ければ多いほど優秀な記録。都市伝説だかであつたな、胃袋にゴキブリが入つて卵を産んで、それが体を食い荒らすつて奴。

虫嫌いは治つてないみたいだな。俺も高所恐怖症は治つてはいなによ。うーん、ゴキブリもエレベーター使う時代なのかねえ。最上階の十五階でも、ゴキブリ、出るみたいだ。そういえば、ねずみはともかくゴキブリってのはずつと昔の太古の頃からほとんど形態が変わつてないらしい。

でもこの時代は人間が余りにも環境を変化させすぎたから、ひとつするとゴキブリも形態が変わるかもしれないんだって。巨大化

して十五センチくらいになつたり、鳴き声を上げたりするかも。ねずみも実際、肥え太つてんのかこの前見た奴は大きかつたよ。何食つてんだろうな。

悪い悪い。怒るなよ。そういうば、なんでおまえここに来たんだ？  
…………へえ。彼女の家の掃除か。ここに住んでるんだな、意外な縁だ。もしかしたらそれ、案外ゴキブリ退治とかをぼかして言つたのかもしれないな。

ははは、安心しろつて。十五センチサイズのが出たら俺が駆除に行つてやるから。強力な殺虫剤も持つてゐるしな。たしか、地下駐車場の備品入れにあつた。今から取りに行つておくか。

おいおい、さつきの話氣にしてるのか？ 駐車場に大型肉食クリーチャーが居るわけないさ。さあ、行こう。

外は雨だな。ここも空氣が湿氣つてゐる。

？ おい、なんだ、あの車の下から広がつてゐる液体……「冗談だよ。ただの雨水だ。こう薄暗くて湿氣つた空氣だと、なんだか何も嫌な目に見えてくるな。実際、俺もさつき階段を下つてゐる時、後ろのおまえが殺人鬼だつたらどうしようとか思つてた。狭いところつて、逃げ場無いからな。怖い妄想が広がる。

ほら、これ。殺虫剤じゃかなり強力な奴だ。これを吹きかけて殺せないときは、ライターの火にスプレーして簡易版火炎放射器にしとくといい。さすがに火には弱いだろうからな。

おつと、早速現れた。小さいけど、すばしijiから練習にはいいんじやないか？ ちょっとやってみればいい。あ、外した。もつと先の動きを予測しないと。またダメか。ちょっと俺に貸してくれ。

つよし。これでおしまい。放つておくと住人のみんなに何か言われるだらうし、ちりとりで片付けておこう……うわううわっ！ なんだ、肩に乗ってる！ 弾き飛ばしてくれ！ くそっ！ 天井から落ちてきやがったのか、このゴキブリ。踏み潰してやる。

なんだ、二匹も一度に見つけるなんて。これはいよいよ、おまえの今日の仕事はゴキブリ退治の線が濃厚になってきたな。……この世の終わりみたいな顔しててるな。冗談だよ、気にするな。最近はここでゴキブリを見かける人が多いんだ。何か、食べかすでも転がってるのかな。

さて、上に戻ろう。そろそろ、おまえの彼女も家に戻ってきてるかもしね。？ ああ、それはカメラだよ。防犯上の理由でエレベーター内部の様子が見えるように、各階のエレベーターホールに設置してあるんだ。ほら、別にコート着た怪しい男なんて映ってないだろ？

え？ 今映ってるの、おまえの彼女か？ なんだ、上の階に用事だつただけか。彼女の部屋、一階だろ？ こっちの方が戻るのは早い。行こう。……どうしたんだ？ 様子がおかしい？

……確かに。かちかちと何回もボタンを押してるみたいだな。ひょつとして、緊急事態か？ ならなおさら早く戻らなくちゃあれ？ 彼女、画面からいなく、

。ひせじへ、

……なあ。

……今、画面で、彼女の、乗つてた、ヘレベーターの、床が、抜けた、けじ。

……俺たちの今居る、このドアの向いから、聞こえた音。

なんだ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9037f/>

---

上下に動く箱

2010年10月15日23時29分発行